

平成 29 年 6 月 30 日

全国重症心身障害児（者）を守る会
各支部長 様
各運動推進委員 様
法人各常任理事会委員 様
各ブロック長 様

全国重症心身障害児（者）を守る会
会 長 北浦 雅子

政府インターネットテレビ「天皇皇后両陛下 障害者に
お心を寄せて」の配信について

5月26日から政府インターネットテレビで天皇皇后両陛下が重症心身障害児（者）にお心を寄せておられる内容が配信されております。

また、6月28日（水）の読売新聞には、この放送が始まったことが紹介され、両陛下のお気持ちと守る会の活動の歴史が記事になっています。

是非、インターネットで「政府インターネットテレビ」を検索していただき、「2017/05/26/15:00 天皇皇后両陛下障害者にお心を寄せて」をご覧ください。

6月28日（水）の読売新聞のコピーは同封いたします。

会員の皆様にも周知していただきますようお願い申し上げます。

なお、この情報は当会のホームページにも掲載しておりますことを申し添えます。

平成の天皇

象徴の歩み

12

△天皇皇后両陛下 障害者にお心を寄せて▽。政府インターネットテレビで先月26日から放送が始まった番組名だ。1959年の結婚以来、心身障害児を受け入れている施設への訪問を始めとして、障害者に寄り添われてきた両陛下の半世紀を約50分の映像でたどることができる。

「重症心身障害児を持つ親たちの苦労は今日からは計り知れないものがあったと思います」。天皇陛下が2004年6月、創立40周年を迎えた「全国重症心身障害児(者)を守る会」の記念大会であいさつされる

姿も番組は紹介している。

このとき、壇上で陛下のお言葉を聞いていた同会の会長、北浦雅子さん(96)の胸には、自身の苦難の歩みが去来した。終戦の翌年に生まれた次男は、生後7か月のときに脳炎を患い、右半身まひなどの重い障害を抱えた。「国は当時、社会の役に立たない子に金をかける必要はないという姿勢だった」。北浦さんはわが子を腕に抱き、「自分が死ぬときは子供も一緒だ」と悲壮な覚悟を決めた。同じ立場の親たちと当時の厚生省や大蔵省を回り、政治家に働きかけ、1964年6

障害者支援の輪を広げる



全国重症心身障害児(者)を守る会創立40周年記念大会の会場で、障害者やその親に声をかけられる両陛下(2004年6月13日、東京都渋谷区の明治神宮会館で)

月、会の設立にこぎ着けた。

国民の憧れの的となった当時の皇太子ご夫妻が、重症心身障害児の施設を訪れ、子供たちと交流される姿は、障害児の親たちの心の支えになった。会の活動により、国立療養所に重症児の病棟が設けられ、療育施設も拡大していった。

「この大会に、重い心身障害の人たちが親の愛に支えられて参加していることをうれしく思います」。記念大会で陛下のお気持ちに触れ、北浦さんは長年の苦勞が報われる気がした。

「障害者や高齢者、災害を受けた人々、社会の人々

のために尽くしている人々

に心を寄せていくことは、私どもの大切な務め」。即位10年を迎えた1999年の記者会見で、陛下は自身の考えをそう明かされた。

宮内庁によると、両陛下が結婚後に視察された福祉施設は、全国で延べ500か所を超える。即位後は「こどもの日」「敬老の日」、毎年12月の「障害者週間」の前後に、関連施設を視察されてきた。子供と高齢者の施設訪問は、2015年から皇太子、秋篠宮両ご夫妻に引き継いだ。障害者の施設訪問は、いまも続けられている。

昨年春の園遊会。招待客のひとつで、ろう者劇団を支援している女優の黒柳徹子さんが、手話の普及に一役買われた陛下に謝意を伝

える場面があった。

両陛下は1979年、黒柳さんが米国から招いたろう者劇団「デフシアター」の公演を観劇された。これをきっかけに、手話の表現力が注目を集め、日本でもろう者劇団を設立する機運が高まった。「日本中で手話をやるのが恥ずかしくなくなり、とてもありがたかったです」という黒柳さんに、陛下は「そうでしたか」と笑顔で応えられた。

皇后さま自身も聴覚障害者と手話で会話されることがある。秋篠宮妃紀子さまや長女眞子さま、次女佳子さまも手話を習得し、「全国高校生手話パフォーマンス甲子園」といった行事に毎年出席されている。天皇ご一家のなかにも、ろう者支援の輪が広がっている。